賀川ハル（1888-1982）における市民社会理解の変遷過程[1]

岩田三枝子
（東京基督教大学専任講師）

序

賀川ハル（1888-1982 以下「ハル」）は、夫である賀川豊彦（1888-1960 以下「豊彦」）と共に、大正・昭和期を通じて、市民社会[2]における活動を展開した。その活動の範囲は、スラムでの貧困層への救援活動に始まり、労働運動、農民運動、消費組合運動等多種の諸組合運動、さらに平和運動と多岐にわたる。賀川夫妻の活動を理解するうえで、妻であったハルの担った役割の重要性については先行研究でもすでに指摘されているとおりであるが[3]、筆者は、そのハルを理解するうえで不可欠な要素が三点あると考える。ハルが女性であること、キリスト教信仰者であること、そして市民社会での活動を展開したことである。

ハルの活動の大部分は、豊彦の活動を共に担うものであったが、活動の中には、労働者女性の人権保護のための婦人運動である覚醒婦人協会など、ハルが中心発起

1　本稿は、2014 年平塚らいてう賞奨励賞による助成、および、2015 年度上廣倫理財団研究助成による研究成果の一部である。また、2015 年 3 月日本基督教学会関東支部会口頭発表「賀川ハル（1888-1982）における公共概念の開示過程」を大幅に修正・加筆したものである。

2　「公共哲学」を、広辞苑第 6 版は次のように定義する。「市民的な連帯や共感、批判的な相互の討論にもとづいて公共性の蘇生をめざし、学際的な観点に立って、人々に社会的な活動への参加や貢献を呼びかけようとする実践的哲学」。この公共哲学の立場から、稲垣は、「市民」を次のように定義する。「非経済的（非利潤的）、非政府的（非暴力的）なレベルでの主体的に活動する意欲のある教養人」（稲垣久和・佐々木炎編『キリスト教福祉の現在と未来』キリスト新聞社、2015 年、111 頁）。その上で、「多様に異なっている人々から成る」「他者性」を視野に入れた（同書、77 頁）、「異なる人びととの間の“協働性”」（同書、78 頁）が存在する市民による社会、すなわち市民社会の形成を提示する（同書、60-116 頁参照）。本論においても、この理解に基づき、賀川豊彦・ハル夫妻が多様な他者のために活動を行った領域を、「市民社会」と呼ぶ。

3　例えば、白石玲子「賀川ハル」（『雲の柱』7 号、賀川豊彦記念松沢資料館、1988 年、163-178 頁）、加藤重『わが妻恋し―賀川豊彦の妻ハルの生涯』（晩聲社、1999 年）、三原容子「愛妻ハルの幸い、社会の幸い」（『ともに生きる―賀川豊彦献身 100 年記念事業の軌跡』家の光協会、2010 年、76-87 頁）、鍋谷由美子『賀川ハルものがたり』（日本キリスト教団出版局、2014 年）など。

人の一人となり展開したハル独自の活動もあった。筆者はこれまで、この覚醒婦人協会の活動とその根底にある思想を検討し[4]、また、それらの活動の背後にあるハルの女性観、および家庭観を考察してきた[5]。さらに、ハルのキリスト教信仰の一端を明らかにするために、ハルのイエス観を検討した[6]。

それらの考察を踏まえ、本稿ではさらに、ハルの市民社会での働きに着目し、ハル執筆の一次資料を中心に、その背後にあったハルの市民社会に向けた理解を検討する。その際、ハルの理解に大きな変化がみられる前半生に着目し、それを三期に区分して考察を行う。第一期はハルのキリスト教入信以前の理解、第二期はキリスト教入信直後の理解、最後に第三期として、それ以降の賀川夫妻の市民社会での働きが日本国内だけではなく、世界的にも認識されていく時期の理解を扱う。さらに、第三期において賀川夫妻の活動の中心的な柱の一つであった組合運動を取り上げ、組合運動における豊彦とハルの思想を比較検討することで、ハルの市民社会理解の一端を考察する。最後にまとめとして、結論と今後の課題を述べる。

第１節　第一期　キリスト教信仰入信前：限定された市民社会への関心

ハルにとって市民社会との出会いは、キリスト者である伯父の村岡平吉（1852［嘉永 5］）～ 1922［大正 11］）[7]が経営する福音印刷合資会社（以下「合資会社」）に勤

4 「『男女の協働』とキリスト教公共哲学―賀川ハル（1888-1982）が覚醒婦人協会において目指した婦人運動」（『キリストと世界』25 号、東京基督教大学、2015 年、64-87 頁）

5 「賀川ハル（1888-1982）における女性観―家庭と市民社会における女性の役割」『キリストと世界』26 号、東京基督教大学、2016 年、15-38 頁）

6 「賀川ハル（1888-1982）におけるイエス観―共に歩む人格的存在者として」（『賀川豊彦論叢』24 号、賀川豊彦学会、2016 年、55-72 頁）

7 1852（嘉永 5）年神奈川に生まれ、1876（明治 9）年、山田はなと結婚する。1883（明治 16）年 4 月 1 日、横浜市住吉町教会（1892（明治 25）年に指路教会と改名）において、米国宣教師ノックス より洗礼を受けた。平吉が 31 歳頃である。その時の様子を、南小柿洲吾（1845-1917）の 1883（明治 16）年 4 月 1 日日記には「本日ナックス氏来ルバプテスマ受クルモノ二名ニ即江川邑岡氏ナリ」と記録される（横浜指路教会百二十五年史編纂委員会編『資料編　横浜指路教会百二十五年史』日本基督教団横浜指路教会、240 頁）。平吉の実姉がキリスト者であったことや、1877（明治 10）年に入社したフランス新聞社「レコ・デュ・ジャポン（L'Eocho du Japon）」が横浜山手の外国人居留地内に位置していたことから、キリスト教の雰囲気が平吉のごく身近にあったのだろうと思われる。なお、平吉は、指路教会「歴代長老、執事一覧」名簿に 1894（明治 27）年～ 1900（明治 33）年、および 1904（明治 37）年～ 1922（大正 11）年 5 月 20 日永

務を始めた16歳の頃だといえるだろう。それ以前は両親や妹と共に生活をし、14歳の1年間ほど家族と離れて女中として奉公していた期間があるとはいえ、奉公先は親戚でもあり、ハルの世界は私的領域内にほぼ限定されていた。しかし、合資会社で勤務をするようになると、親族の経営する会社ではあったものの、親族だけではなく、年齢、出身地、関心等がハルとは全く異なる多種多様な人々である同僚たちの間に身を置くことになる。これが、ハルにとっての市民社会との出会いとなる。

その頃のハルの目には、この市民社会はどのような場として映っていたのだろうか。例えば、合資会社での勤務を始めた頃を回顧する一文では、「社会に恐るべき罪悪の多々あることを知つた」として、「給料の支払日には必ず遊郭に足を入れ」、その結果「悪性の病毒を受けて来て悩むで居る」「青年達」や、「真面目に働いて居るかと思へば支那人、その他外人に貞操を売つて居る」「女工」をあげる[8]。職場において初めて「社会」の「恐るべき罪悪」の存在を知ったというハルは、多様な他者は多様な価値観・思想を持っており、自らとは異なる人々であることを、「罪悪」というネガティブな形として認識したといえる。ここでハルが「罪悪」と記す内容は、男性が「遊郭に足を入れる」ことや、女性が「貞操を売っていることである。つまり、ハルがこの時に知ったという「社会の「罪悪」は、この時点においては、市民社会の広い視点に基づく理解ではなく、各個人の性倫理における問題であり、その点では、各個人の私的領域における視点だといえるだろう。

しかし、同じ文脈の中に、そのような私的領域における視点よりも広い視野から労働者にとっての社会の不合理を述べた一文がある。（以下、引用文の下線は筆者による）

眠までの期間に指路教会の長老として名が記録されている（横浜指路教会百二十五年史編纂委員会、前掲書）。横浜太田町の王子製紙株式会社に入社し、1898（明治31）年、福音印刷合資会社を設立する。平吉が46歳頃のことである。聖書、讃美歌、聖公会の祈祷書、講壇用の大型聖書、トラクト等を印刷していた。ハルとハルの父親・房吉が勤務した神戸支店開設は1904（明治37）年であり、房吉は支店開設直後の1904（明治37）年5月から、そしてハルは同年10月から1913（大正2）年3月末までの8年半にわたって勤務する。平吉・はな夫妻には、6男2女があり、はなは1909（明治42）年に病死し、平吉は妻の死後の13年後の1922（大正11）年5月20日に亡くなった。

8　賀川はる子『女中奉公と女工生活』（1923年）（三原容子編『賀川ハル史料集』第1巻、緑蔭書房、2009年、24頁）。ハルの執筆名は、その時々において「賀川はる子」「賀川春子」「賀川ハル」と表記が異なる。そのため、基本的には各原稿に記載された執筆名に従い、執筆名が記載されていない日記等に関しては「賀川ハル」と記載することとする。また、ハルに対するインタビュー記事等、執筆者名が記載されていない文献に関しては、執筆者名を記載しない。

> 会社或は資本家の利益分配の不平等を考へ、今日の労働者の不利益な地位に居ることを思ふならば職人のさうしたことが九牛の一毛にしか過ぎないと云ふかも知れない。（中略）労働は神聖なりと云ふ働人が誠に正々堂々と一点の非なく労働の運動を進ますべきだと私は思ふ。[9]

これは先の引用と同じく、合資会社での勤務の日々を回顧する場面であるが、ここでは私的領域的な視点を越えて、より広い視野から、会社、資本家、労働者のあり方を問うている。ただし、この文章が1923（大正12）年、ハルが35歳頃の執筆であることを考えると、16歳のハルは、先に挙げた各個人の性倫理に関する内容を社会にある「罪悪」として認識した範囲にとどまることに対し、35歳のハルが「私は思ふ」として、社会全体のより広い視野から労働者にとっての市民社会における不合理を訴えていると判断することが自然であろう。つまり、16歳の時点でのハルは、私的領域外の世界において初めて市民社会との出会いがあったものの、市民社会に対する開かれた積極的な関心にまでは至っていないと考える。

先に触れたように、市民社会に触れ、市民社会における活動も知ったハルであったが、後のスラム活動へとつながっていく社会の貧困や世界の問題に初めから目が開かれていたわけではない。ハル自身も、キリスト教入信以前の女工時代は「毎朝出勤前に新聞は待ち兼ねて読むが世界の大勢がどうならうとどんなことが議会に上つてゐるのか自分には少しの関係もなく、続物の講談と三面のところどころ、芝居の芸題などを見るのであつた」[10]と述べており、また次のようにも記している。

> 明治四十四年、社会にはどんな事件が有るのかは少しも知らず、自分はただ印刷工場が自分の世界であつた。[11]

「明治四十四年」（1911年）は、当時23歳であったハルが勤務する合資会社で行われていた礼拝に後に夫となる豊彦が牧師として初めて訪れた年であった。ハルは、キリスト者であり、横浜指路教会の教会員であった伯父夫妻の村岡平吉・はな[12]を

9　賀川はる子『女中奉公と女工生活』（1923年）（三原、前掲書 第1巻、33頁）
10　賀川はる子『女中奉公と女工生活』（1923年）（三原、前掲書 第1巻、42頁）
11　賀川はる子『女中奉公と女工生活』（1923年）（三原、前掲書 第1巻、42頁）
12　村岡はなは、ハルの父親の姉であった。はなの横浜市住吉町教会（1892 [明治25] 年に指路教会と改名）における受洗について、当時無牧であった教会において牧会的働きを担っていた南

通してキリスト教について知っており、勤務先で印刷されているキリスト教のトラクトを読んだことはあっても、それ以前にはキリスト教信仰は持っていなかった。ハル自身が回顧しているように、この時まで、ハルは合資会社の女工として働きながらも、その関心はきわめて私的な領域に限られていたといえる。ハルの関心は、ハルが好んでいたという滝沢馬琴などの小説や、関係雑誌を購入するほど熱を入れていたお芝居、といった自身の日々の生活の楽しみに終始するものだったのだろう[13]。

鍋谷は、ハルがキリスト教入信以前からナイチンゲールに関心を持っていた点を指摘し、「ハルはすでにナイチンゲールの影響によってハルが豊彦と会う以前から、ハルの心の中に社会運動に対する芽ぶくものがあったことがハルの著作から推察することが出来る」[14]とする。また、「ハルの貧しさ・不条理への憤りは、豊彦から学んだことが最初ではなく、ハルの成育史の中で培われてきたものであ」って、「社会運動への関心と貧しさや社会への不条理への憤りは、ハルがキリスト教を受け入れる以前に持っていたものであり、キリスト教と関係のないものであった」[15]とする。

しかし、豊彦と出会う以前、つまりキリスト教入信以前からハルの中に「社会運動に対する芽ぶくものがあった」と断言することは難しいのではないだろうか。鍋谷は、ハルがナイチンゲールに言及する一文を引用するが、そこでハルがナイチンゲールの働きを尊いとした理由は、14歳のハルが女中奉公をしている中で出会った小按摩の仕事が、看護婦と同じく「どんなにか人を喜ばせることが出来よう」という文脈である[16]。つまり、広い市民社会的視野に立った上での見解ではなく、あくまでも、「一人の人に喜びを与える」という個人的なレベルでの感想であり、「社会運動に対する芽ぶくもの」といった広い視野とは異なるレベルであると考えた方がよいだろう。

ハル自身も、自らの女工時代を回顧して、次のようにも述べている。

小柿洲吾（1845-1917）の1883（明治16）年6月3日日記にも「十時ナックス 氏邑岡花女（中略）ニバプテスマヲ施ス」として記録されている（横浜指路教会百二十五年史編纂委員会、前掲書、249頁）。

13　賀川はる子『女中奉公と女工生活』（1923年）（三原、前掲書 第1巻、47頁）

14　鍋谷由美子「賀川（芝）ハルをスラム街へと動かした原動力とは」（『雲の柱』28号、賀川豊彦記念松沢資料館、2014年、66頁）

15　鍋谷、前掲論文、68頁

16　鍋谷、前掲論文、66頁

> 社会に貢献し人類の幸福を計る様なことが全然ないとは云はれないのでありますが、それが如何にも稀であるのであります。殊に永年間工場に於ての女工生活を続けて居る私は、勿論その見聞が狭いと云ふより寧ろないと云ふのが至当であります。[17]

上記の理由からも、キリスト教信仰入信以前のハルの市民社会に対する理解は、「社会運動に対する芽吹くものがあった」とは断言しがたく、むしろ同僚の性的倫理観に対する嫌悪感や、または小説と芝居などのハル自身の日々の生活の楽しみといった、個人レベルのものであり、私的な関心に限定されていたとの理解が適切だろう。

雨宮は、キリスト教に入信する前のハル像について、「この頃のはる（ママ）は、労働条件の改善のため、何とか立ち上がらねばと考える人ではなかった。そのような自覚はない至極平凡な、そして生真面目な女工であった」[18]との評価の方が、当時のハルの視点に近いと思われる。

また鍋谷は、「ハルは明治の封建制度の時代を生きる中で、女性の立場や就労が貧困や社会問題と関係していることを体験したのではないか」[19]と推測している。しかし、雨宮が「社会問題に注目し、興味と関心を抱いていた女性でもない。まして女性の地位、権利の回復を自己の使命としていたわけでもない」[20]と評価しているように、確かにハルは「女性」として、「貧困や社会問題」を「体験した」かもしれないが、ハルの執筆にみる限り、「女性の立場」と「社会問題」とを結びつけ、批判的に考察するほどの視点は、この時点ではまだないと考える方が自然だろう。

つまり、広い視野に立った社会運動に対する「芽ぶくもの」はなかったが、ハルの生育過程において養われた潔癖・厳格な倫理感覚が、スラムにおける救霊団、後のイエス団の活動に出会ったときに、その活動内容と結びつき、ハルの心を新しい世界へと導く重要な一要因となったとの理解がふさわしいのではないか。

以上、キリスト教信仰入信以前のハルは、潔癖・厳格な倫理的基準はもっていたものの、それは個人倫理的な範囲にしかすぎず、市民社会への関心はまだ開かれていなかったと結論付けることができる。

17　賀川はる「大きい感動」（『婦人之友』16［6］、婦人之友社、1922年）（三原、前掲書 第1巻、361頁）
18　雨宮栄一『貧しい人々と賀川豊彦』新教出版社、2005年、63頁
19　鍋谷、前掲論文、66頁
20　雨宮、前掲書、86頁

第２節　第二期　キリスト教入信後からスラム活動期初期：個々人に向けられた視点

個々人との出会い

豊彦のキリスト教の説教を機に24歳で信仰の決心をしたハルは、同時に豊彦やその仲間たちによるスラム活動を行う救霊団を知り、自らもスラム活動への取り組みに参加していくが、ハルはスラム活動における対象者に対してどのような視点を持っていたのだろうか。

豊彦の場合は、10代のころからトルストイや木下尚江、安部磯雄などの著作を読み、市民社会への関心を寄せていたといってよい[21]。その豊彦にとって、21歳の時、最も身近にあった取り組むべき課題が新川のスラムであったのだろう。つまり、市民社会への関心が先にあり、その具体的行動の場がスラムであったといえる。

一方、ハルの心を最もとらえたのは、理論ではなく、豊彦たち救霊団の、スラムに住む一人一人に対して取り組む姿そのものであった。

> 驚いたことはそれに止まらなかつたのであります。私は不思議な一団体にこの貧民窟で出会うたのでありました。団体と云ふ様なものの実は極く少人数のものでした。貧民窟の五畳敷の長屋を三軒続けて其処に居住し、世話人の無い病人を引き取り医者に送り、顔面や手先が腐つた癩病患者と共に居り、臭気の強い梅毒患者の包帯を替へ、監獄行の婦人の嬰児を連れて来て、男子の手に乳を溶いて養育し、重病患者の糞尿を取り、三度の食事を二度に減じて飢えた者と粥をすすり合ふ、極寒の綿入もなく寒風に病弱の身体を晒して路傍にイエスの愛を説く、この尊い、美しい行為に私は驚いたのでありました。そして考へさせられました。この得難い尊い精神が何に依つて獲得出来るのでせう。如何なる修養に依つてそれが出来るのであらうかと思つたのです。そしてそれがイエスの精神から流れ出るものであることが解りました。実にイエスの感化の偉大なることを深く深く感せしめられたのでありました。[22]

また、ハル自身がスラムで働くきっかけとなった出来事の一つは、ある家族との出会いであったとして、次のように記す。

21　雨宮栄一『青春の賀川豊彦』新教出版社、2003年、172-178頁

22　賀川はる「大きい感動」（『婦人之友』16（6）、婦人之友社、1922年）（三原、前掲書 第1巻、360頁）

> 当時私は印刷会社の女工でありましたから、彼らを物質で充分助けることが出来ないが、何なりとして彼等を慰め度とそれ以後は日曜毎にその家を訪問致しました。箒より乱れた髪も少しづゝ梳いて綺麗になり着物を持つて行つて着替えさせ、家を掃除して子供の顔を洗ひ、家の内を片づけましたので、彼らも私の行くことを非常に喜こんで迎へました。
>
> これは私には極めて強烈な刺激であつたのでした。それでかう云ふ人達の間に住まつて幾分にてもそれ等の人達を慰め得られるならば、自分は喜こんで貧民窟に這入らうと決心致しました。[23]

つまり、社会悪や正義といったいわば抽象的な理論や概念から出発してスラム活動に入ったのではなく、一個人との具体的出会いがスラム活動の動機となった、ということだろう。またその動機も、社会を変革するべきであるというような広い視野にたった動機ではなく、ハル自身が人々に「慰め」を与える存在になりたいという主観的な側面が強い。

しかし、そうであるからといって、ハルの内面に、悪や正義といった概念が全くなかったわけではない。先に見たように、ハルがキリスト教入信以前から厳格な倫理観を持ち合わせていたことが、スラムの子供に出会ったときに、自らも何か助けとなることを行いたいという具体的な行動と結びついたのだろう。

豊彦にとっては、市民社会における正義という大きな枠組みの具体的アプローチの一つとしてスラムがあった。一方、ハルにとっては、スラムの一人一人に実際に寄り添う救霊団の若者たちの姿への感動と、自らが関わることで一家族に変化が起こり、ハル自身の存在が喜びとして受け入れられるという充足感の体験が出発点となり、その延長線上にスラムの活動があったといえる。

客観化する視点

スラム活動開始のきっかけだけではなく、スラムでの活動対象者への視点においても、ハルと豊彦では異なる点がある。

豊彦は、他者の悲哀に共感し、時には豊彦自身を救済の対象であるスラムの人々と一体視するような場面が見受けられる。例えば、豊彦の自伝的小説『死線を超えて』の中では、豊彦自身をモデルとした新見栄一が、「土べたの上に落ちた小米を

23　賀川はる子「貧民窟物語」（1920年）（三原、前掲書 第1巻、81頁）

拾ひ集めて、お粥にして炊いて食」べる貧困の状態を説明しながら涙を流す「おかみさん」に、「すぐ貰ひ泣きをして」、「『神さま、どうして貧乏人はこんなに苦しむんですか??』」と「ヒステリーにかゝつた人の様に泣」くエピソードが挿入されている[24]。あたかも、「おかみさん」の貧困の苦しみを、豊彦自身もまた体験しているかのようである。また、豊彦が神戸神学校在学時代に記した「無の哲学」では、対象である神と自らを同化させるような記述がみられる。

> 神様は自殺なさる事がないのであらうか？
> 神様も奮闘してゐらつしやる。
> アゝ私も神様の様に奮闘しよう。
> アゝ神様も苦しんでゐらつしやる。神様、神様……。[25]

ここで、豊彦の神の苦しみと自身の苦しみを同化させているかのようであるが、ヘイスティングスはこれを、豊彦が「神と一体になりたがる」[26]と表現している。

一方ハルの視点は、異なってみえる。例えば、ハルの日記の中には、スラムの住居において「お光」と呼ばれる女性を世話する苦悩が幾度か登場するが、その場合においても、ハルはお光と自分自身を一体化することはなく、あくまでも、お光を自らとは区別された存在として客観化して捉えている。下記は、お光の世話の仕方が十分ではないとして豊彦から叱責を受け、涙を流したとする日の日記である。

> お光の世話は自分では随分尽してゐるつもりであるが、主人の目から見るときは未だ足ないと見えて私は叱られる。つまり私の行の程度が高くなつて来て居ることに自分が気がつかずして煩悶する。自分はもう泣くまいと決してから度々涙を流した。[27]

ハルは、お光に対する自身の態度のことで豊彦から叱られ涙した、と記しているが、これは、先述の豊彦をモデルとした新見が「おかみさん」の苦労話にもらい泣きを

24　賀川豊彦『賀川豊彦全集』第14巻、キリスト新聞社、1964年、158頁
25　賀川豊彦、前掲書 第24巻、368-369頁
26　トマス・ジョン・ヘイスティングス「賀川豊彦―科学的な神秘主義者」(『モノ学・感覚価値研究』第8号、2014年3月、20頁)
27　賀川ハル「1914年日記」(4月26日)(三原、前掲書 第1巻、162頁)

する涙の意味とは異なる。豊彦は、他者の悲しみを自分のものとして捉え、「おかみさん」の貧困を苦しむがゆえに、涙を流した。一方ハルは、お光に対する同情心や共感よりもむしろ、あくまでも「私の行の程度が高くなつて来て居ることに自分が気がつかずして煩悶」しての涙、という主観的理由である。

さらにハルは、この「涙」を乗り越える方法も、お光への同情心や共感によるのではなく、神からの「試験」として受け止めることで、乗り越えようとする。下記は、上記の涙から3日後の日記である。

> 乞食の心は誠に困つたものでどこまでも付上り近頃では便器を差し入れて呉ふのをうるさがり、そのまま大小便をするので着物も布団も濡れるので手数がかかるが、神より与へられた試験物だから自分は彼に頭から悪口をあびせられても気まま云はれてもしてゐる。近所の人はほめるが自分は少しも善事をしてゐるとは思はぬ。試験だもの。[28]

救済の対象を客観化して捉えるハルの視点と、対象と自らを時として一体化する豊彦との視点との相違があったからこそ、ハルと豊彦は二人三脚での市民社会活動の継続が可能であったのかもしれない。両者が、救済の対象への共感に終始するだけでは、感情に埋没してしまう危険性がある。一方で、ただ客観視しているだけでは、当事者の視点に立った働きは難しい。両者のバランスがあってこその活動でもあったのだろう。

後年、豊彦がハルに送った妻恋歌がある。ハルの伝記にはしばしば登場する詩であり、豊彦とハルの絆の強さを伝える詩でもある。妻恋歌の一節には、「憲兵隊の裏門に／未決監の窓口に／泣きもしないでたたずみし／わが妻恋しいと恋し」[29]とつづられる。1940（昭和15）年8月25日、豊彦は反戦運動の嫌疑で渋谷憲兵隊に拘引され、9月13日に釈放されるまで巣鴨拘置所で過ごすが、その時の状況をうたっているのだろう。またその後、豊彦は家族の住む東京を離れ、一人で香川県豊島で一時期を過ごすが、豊島にいる豊彦からハルへの9月19日の手紙には、「この旨中ハほんとに御心配また御心甚しの程感謝いたします　強いあなただから安心いたして居りました」[30]とある。これもこの拘置所の時の状況を指しているのだろ

28　賀川ハル「1914年日記」（4月29日）（三原、前掲書 第1巻、163頁）
29　賀川豊彦「三十九年の泥道」（三原、前掲書 第2巻、306頁）
30　賀川豊彦記念松沢資料館収蔵資料

う。ここには、豊彦が入獄した際にさえ、「泣きもしないで」夫の帰りを待つ「強い」ハルの姿がある。あくまでも豊彦は豊彦であり、ハルはハルである、という客観化する視点による冷静さも「強い」一要因として加味できるかもしれない。

以上のように、ハルにとってスラム活動開始のきっかけは個々人との関わりからはじまったものであり、しかしハルはその個々人と自らを同化することなく、対象化して捉えることで活動を行っていたといえる。

まとめ

以上のように、スラム活動初期のこの時点においてハルの視点は、自分への関心からスラムにおける個々人に対する関心へと広げられていく点においては、市民社会に向けて関心の萌芽がみられる。しかしそれは、先にみた、ナイチンゲールの働きが、一人の「人を喜ばせる」ことに対しての憧れであったように、スラムでの働きの初期においてのハルの理解は、この「一個人に対する関わり」の延長線上にあったといえるだろう。つまり、スラムに住む一人一人を助ける、個人的な関係性の段階であったといえる。ここから、キリスト教入信直後のハルは、市民社会に対する自覚的な認識を持っているとはまだ断定しがたく、その関心の範囲はなお個人的範囲内での関心と感動にとどまっているといえるだろう。

第３節　第三期：市民社会的活動中期以降

第１項　市民社会への視点の広がり

視点と交流の拡大

ハルは1914（大正3）年から1917（大正6）年にかけて、豊彦がアメリカに留学している同じ期間、横浜の共立女子神学校[31]に在学し、卒業後、再び神戸に戻り夫妻でスラム活動を再開した。その後のハルの視点は、市民社会へとより広く開か

31　共立女子神学校 は1881（明治14）年9月、バイブル・リーダーを養成する専門の学校、偕成伝道女学校として設立された。1891（明治24）年、米国婦人一致外国伝道協会（WUMS）を通して派遣されたルイーズ・H・ピアソン（Louise Henritetta Pierson, 1832-99）が偕成伝道女学校校長専任となった。1899（明治32）年にピアソンは亡くなり、ハルが在学時代に交流を深めることとなるスーザン・A・プラット（Susan A. Pratte）が二代目校長として就任した。1907（明治40）年2月、偕成伝道女学校は共立女子神学校と改称した。

れていく。その視点の広がりは、次のような 1921（大正 10）年の言及にも表れる。

> 幸にイエスの恵に依つてこの発見をなし得たものは、よろしく神の栄のため、人類幸福のため、社会に対して奉仕するところの大からんことを願ふ。[32]

次は、1922（大正 11）年の言葉である。

> 人類が互に愛し合ふて、実際にこの世に存在する人たちが幸福に生活することであります。従つて人に仕へ、社会に奉仕することを願う。[33]

スラム活動初期と比較すると、ハルは「人類」という用語を用い、より広い視点がうかがえる。

また、この視点を裏付けるように、共立女子神学校を卒業し、神戸に戻ってきた後は、実際の活動もまた、労働組合の活動など、市民社会とのより密接な関わりを含むようになる。同時に、交流範囲も拡大する。スラム活動の初期においては、救霊団のメンバーたちがその活動を共にする同志であったが、1920 年代に入ると、賀川夫妻のスラム活動は広範囲の人々に認知されるようになり、東京女子大学生たちのスラム研修のための訪問[34]、平塚らいてうが女性を取り巻く問題意識を携えての訪問[35]、アメリカでセツルメントを開設したジェーン・アダムズの来訪[36]など、国内のキリスト教の教団教派を超えるだけではなく、多様な国や活動内容に携わる人々との交流が広がる。

救貧から防貧へ

そのようなスラム活動の中で、ハルの着眼点の変化を示すのが次の 1920（大正 9）年の引用である。

> 貧民窟に対して従来は単に金銭物品の施与を以て貧を救はんと致しました、勿

32　賀川はる「隠れたる真珠の発見」(1921 年）（三原、前掲書 第 1 巻、315 頁）
33　賀川はる「大きい感動」（『婦人之友』16 [6]）、婦人之友社、1922 年）（三原、前掲書 第 1 巻、361 頁）
34　三原、前掲書 第 1 巻、367 頁
35　賀川ハル「1919 年日記」（三原、前掲書 第 1 巻、245 頁）
36　『覚醒婦人』第 18 号（1923 年）、8 頁（三原、前掲書 第 1 巻、416 頁）

> 論眼前の貧困はその慈善に待つでありませうが、これが根本的の防貧策としては、住宅が改良され、彼等に教育なるものが普及され、飲酒を止めて風儀を改め、趣味の向上を計るなどこれら、貧民窟改良事業を労働運動に合せて行ふ時に、今日の一大細民部落の神戸市から跡を絶つに到ると信じます。[37]

> 工場生活と、貧民窟の生活の、この二方面の共通点は、貧乏そのものであるのであります。これが根本的の防貧策としては、所詮労働問題が解決されなければならないと思ひます。[38]

また、1922（大正11）年には、次のような言及もある。

> 斯うした人達の機嫌をとるために無暗に金を与へるのも考へものだと思つてゐたのです。[39]

ここには、救貧から「防貧」への意識の変化がみられる。ただ足りない部分を「与へる」のではなく、その貧困を生み出している社会システムそのものの変革の必要性への視点である。一個人の貧困だけではなく、貧困を市民社会全体の問題として捉える時、一人一人の生活への眼差しと同時に、より広い視野からの取り組みが必要となる。それが、救貧から「防貧」への意識の変化である。それは、スラム活動での体験からくる実感であったのだろう。

当初は、一家族に関わりたい、という一個人に対する救貧の思いから出発した活動であったが、個人的な同情や熱心だけでは解決できない問題にハルは気が付き、同時に、多様な宗教、関心、文化の人々との交流の中で、ハルはより広い視座を得るようになったのだろう。またそのような他者の中に生きる力と視点は、ハルが在籍した共立女子神学校での、多様な教団・教派、文化、年代、関心を持った女性たちや宣教師たちと過ごした3年間に養われた面も看過できないのではないだろうか。

37　賀川はる子「貧民窟物語」（1920年）（三原、前掲書 第1巻、133頁）
38　賀川はる子「工場より貧民窟へ」（1920年）（三原、前掲書 第1巻、280頁）
39　「私と良人と仕事と」（『婦人之友』16（1）、婦人之友社、1922年）（三原、前掲書 第1巻、305頁）

市民社会における働きと信仰

また、次の引用は、豊彦たち救霊団の働きを目の当たりにした24歳頃を回顧した一文であるが、ハル自身の小さな世界の中での関心が、他者への関心へと開かれたことを示す興味深い記述である。

> 社会の最もドン底とも云ふべき細民窟に於て犠牲とか、献身とか云ふことさえ主観にないほどの働きの出来る宗教に出会ふた私は、実に非常な感動を受けたのでありました。それ以来私の行くべき方向は今迄とは変つて来ました。私の希望は今迄持つて居つた様なものでなくなり、私の喜びは其日まで持つて居つた安逸の様なものでは有り得なくなりました。私の悲しみは、自分の貧乏だけであつたものがそれ以来、多くの人々がその悲しみより救はれない悲しみとなりました。私がその日以来終生の目的が富を得るためでもなく、名誉を一身に受けることでもなくなりました。人を幸福にする様には何物も自分に所有して居らないのでありますから、何の仕事も出来ないのが当然でありませう。然し只私が許されて出来れば、人類が互に愛し合ふて、実際にこの世に存在する人達が幸福に生活することであります。従つて人に仕へ社会に奉仕することを願ふのであります。[40]

これは、先の「お光」の世話をしていた1914（大正3）年よりもさらに8年後の1922（大正11）年の執筆である。ここに、それまでのハルの市民社会に対する理解との大きな相違が三点みられる。

一点目は、私的関心から、市民社会への関心の広がりである。ハルは、「私の悲しみは、自分の貧乏だけであつたもの」だったのだが、「多くの人々がその悲しみより救はれない悲しみ」へと変化したと記す。私的な世界だけに閉じられていた関心が、より広い市民社会への関心へと開かれていった視点が示される。ただしこのスラム活動に初めて出会った24歳頃の時点では、多くの人びとの悲しみに触れ、その世界を知ったものの、市民社会における活動の必然性はまだ十分に理解していないと考えられる。しかし、自分の願いは「人類が互に愛し合ふて、実際にこの世に存在する人達が幸福に生活すること」だとしている部分においては、多様な他者の生の幸福をも視野に入れており、市民社会の認識が明確になっているが、過去形

40　賀川はる「大きい感動」（『婦人之友』16（6）、婦人之友社、1922年）（三原、前掲書 第1巻、361頁）

で書かれてきたその前の部分とは異なり、現在形で記されているこの部分は、24歳頃のハルが考えたことであるよりも、執筆時の35歳のハルの理解であると考えることが自然だろう。つまり、ハルの関心は、24頃歳の時点で「私」から「多くの人々」に開かれ、そして35歳の時点までには「人類」、つまりさらに多様な他者を包括する「人類」にまで開かれていくと考える。ここには、時間の経過に伴い、ハルの市民社会に対する理解の変遷過程をたどることができる。

そのような時間的経過でこの部分を解釈すると、その人々が「幸福に生活」をするために「人に仕へ社会に奉仕することを願ふ」とハルが述べる時、二重の意味が現れてくる。つまり、初めて若者たちによるスラム活動を知った時点での「社会に仕えること」とは、スラム活動自体であった。一方この記述が、ハルがスラム活動と並行して覚醒婦人協会の活動最中の1922（大正11）年頃の執筆であることを考えると、執筆当時のハルにとっての「社会に仕える」とは、スラム活動と同時に、覚醒婦人協会およびこの時期に展開していた労働組合等の諸組合活動をも含むものだろう。ここから、幸福があるようにとハルが願う「多くの人々」は、1911（明治44）年頃にはスラム内に居住する貧困層の人々であり、執筆の1922（大正11）年頃にはスラムだけにはとどまらない、多様な他者としての、より広範囲の女性たちや労働者たちも含むものへと拡大したと考えられる。

二点目は、市民社会への参与の自覚の萌芽である。16歳のハルが知った「社会」は「罪悪」の世界であり、それはハルにとっては汚らわしいもの、避けるべきもの、というのみの世界であった。しかしスラム活動の中で知った社会の「悲しみ」は、忌み嫌い、汚らわしいとして避けるべきのみのものではなく、自らがその場所に入って行き仕える対象となった。市民社会に存在する罪悪は、その中にあっていかに自らの役割を果たしていくべきかという視点へと変化している。

三点目は、市民社会における活動と信仰との統合である。ハルは豊彦と出会った直後、豊彦の活動に賛同する仲間たちである救霊団が取り組むスラム活動を知る。キリスト教の信仰によってスラムの人々に仕えているキリスト者たちの姿を見たハルは、「社会の最もドン底とも云ふべき細民窟において犠牲とか、献身とか云ふことさえ主観にないほどの働きの出来る宗教に出会ふた私は、実に非常な感動を受けた」と述べる。そして、ハル自身も「人に仕へ社会に奉仕することを願う」とする。ハルはここで、宗教、つまりキリスト教の精神が「人に仕へ社会に奉仕する」原動力になっていることを認めている。キリスト者たちがスラムにおいて活動する姿を通して、信仰と市民社会における活動とが統合された一元的なものとしてハルはキ

リスト教を受容した。

このような視点は、後年の執筆にもみられる。

> 神に服従し、（中略）神に従つて奉仕の生活をするのが信仰生活者のとるべき態度である。私はこの信念にもとづいて、私に与えられてゐる健康、与えられてゐる時間をもつて、弱い人々への奉仕を始めたのである。[41]

ここでも、「神に従」うことと、「弱い人々への奉仕」が密接に結びつけられて理解されている。キリスト者たちが市民社会のための活動を行っている姿に触れ、信仰と市民社会のための活動とに一つのものとして出会ったハルは、その両者を最初から密接不可分のものとして受け止めた。ハルにとって、信仰とは、すなわち市民社会のための働きと切り離されてはいなかった。

スラムにおける活動を継続しつつ、その過程において培われた市民社会に生きる感覚は、個の視点から市民社会の視点への移行ではなく、個の視点を保持しつつも市民社会にむけた視点にも開かれていった、との表現が適切ではないだろうか。

第２項　組合運動

市民社会における賀川夫妻の活動の柱の一つは、組合運動であった。ここでは、ハルの市民社会理解の第三期の一端として、組合運動に対するハルの理解を、豊彦の理解と比較しつつ検討を行いたい。

「組合」との出会い

ハルが初めて組合らしきものに触れるのは、女工時代の合資会社で開始された組合であった。「英国式」で組織された組合で、「子供心にも」優れていると感じたとハルは述べる。

> 始めて私共の間に一つの会が組織された、それは極く小さいものであつた。つまり労働組合の初期に於て英国などに於てもあつた様な所謂葬式組合なるものである。で各自収入に比例して僅かな会費を積立てて会員中の幸不幸に対して

41　賀川春子「社会事業家の妻として四十年」（『婦人公論』1950年９月）（三原、前掲書 第２巻、300頁）

一定の金額を送る様になつてゐる。（中略）子供心に流石教育のあるものの勝れて居ることを泌じみ感ぜしめられたことであつた。[42]

合資会社で「英国式」の組合が設立されたという背景には、村岡平吉の三男・斎が3年間ロンドンに留学していたことも関係しているのかもしれない[43]。

合資会社に「英国式」の葬式組合が設立された正確な年は不明であるが、上記の記述が、ハルの著書内の合資会社に関する記述部分の比較的早い段階に登場することから、ハルが合資会社に勤務していた1904（明治37）年から数年以内での「葬式組合」の設立であるとするならば、キリスト者であった鈴木文治が組織した労働者団体である友愛会の設立が1912（明治45）年であることと比較しても、合資会社の組合設立の試みは先駆的であったといえるだろう。

ただし、労働組合の重要性をハルが自覚的に認識するようになるのは、さらに後のことである。

助け合うこと

女工時代に合資会社において「葬式組合」を知ったというハルであったが、自覚的に「互いに助け合う」または「協同」について語り始めるのは、スラム活動に関わるようになってからである。

貧民は自分が苦しんだ経験があるからでもあると思ひますが友を助け様(ママ)と思ふと実際よく助けます。自分の処に食べ物があるだけ友と一緒に暮します、つまり自分の全財産を提供して尽すのです。これは彼の簡易生活がなさしめるのだと私は思ひます。（中略）自分の為めにのみ贅沢をして親戚の不幸なる子供を其門前から突き放つ様な人は此処に住む人より不幸である事と私は思ひま

42　賀川はる子『女中奉公と女工生活』（1923年）（三原、前掲書 第1巻、27頁）

43　1909（明治42）年に永眠したハルの伯母である村岡はなが、「斉がロンドンへと発った8日後に亡くなった」（村岡恵理『アンのゆりかご―村岡花子の生涯』マガジンハウス、2008年、132頁）とあることから、斉のロンドン留学は1909（明治42）年から3年間と推測できる。ハルは、神戸の港から英国へと出発した斉の見送りに行ったことを記している（三原、前掲書 第1巻、38頁）。なお、村岡斎は、1894（明治27）年8月26日に幼児洗礼を受けており、また1921（大正10）年～1923（大正12）年9月1日関東大震災による死去までの期間、横浜指路教会の執事として記録されている（横浜指路教会百二十五年史編纂委員会、前掲書、425頁）。

す。[44]

上記は、「組合」への直接の言及ではないが、「貧民」同士が「友を助け様(ママ)」とする様子を描写する。それは、家族や親族といった私的な領域を超え、市民が公共の領域において自覚的に友愛によって連帯する重要性への気付きであるともいえる。

また、このように「「貧民」同士が「助け」合うだけではなく、ハル自身もまた「助け」合う一員の当事者であるという事実に、ハルはある時気が付いたとして、次のように記す。

> 此頃女性が手紙を私宛に寄せて、生死の間をさ迷ふて居る、何日かハ訪ねるから救つて呉れとの文面であつた。従来この種の手紙ハ度々受けたのでさして珍しい特殊なものハ見ないが、私自分に今迄とは違つた考へが起こつた。斯うした手紙を受ける時いつも、ただ救ふ立場をのみ考へて居たから、どうもそう一々受け入れることが出来ないと思つて真剣に考へなかつた。今度ハ私の方から少しそうした人に、つまり自分を頼つて来る人に、私も援助して貰へばよい訳である。助け合をした方が真剣である。自分も時間を費ふことが下手でもあるが、随分多忙である。何かしら主人が忙かしく多くの事業を持ち働きを持てば、従つて家も多用な訳である。悩める人の手紙でも整理し兼ねて居る。来客も多く泊り客も常にある。夜具の整理すら衣服の始末も私に助手がない。広本様ハ台所だけ手伝つて呉れるが外の事ハ掃除、針なとハせぬので、この家にしてハ助手が有つてもよいが、女中を置かぬとする家でハ、そうした奉仕者に助けて貰へバ好都合である。それだのに私は自分一人で何んでも仕様とするので出来ないことだらけ。之ハ大に改めて先方の要求も入れ自分も助けて貰つてお互に仕事を進め度。でどうか神様の導きで先方も或部分の満足が得られ、私の方でも助ける立場ばかりでなく助けられる方面も持つ様にあり度と願ふ。その適任者である様にもと祈らざるを得ない。つまり救けると云ふ高い立場でなく、助け互に私共を下げなければならない。教訓を自分ハ得た訳である[45]

ここでは、互いに助け合う実践の必然を、ハル自身が認識した様子が記されている。

44　賀川はる子『貧民窟物語』（三原、前掲書 第1巻、110頁）
45　賀川ハル「1928年日記」（6月12日）（三原、前掲書 第2巻、75頁）

多様な組合運動へ

このような助け合うことへの気付きの中、スラムで組合の働きが実際に展開されていく様子を、ハルは次のように評価する。

> 青年たちは（中略）神戸に於て前例の無い一つの仕事を発見した。それは購買組合で、青年は皆これに投じることとなつたのである。（中略）小さきグループがこの立派な仕事をして行かれたのは全く信仰の賜に外ならない。[46]

ここでハルは、イエス団が購買組合を始めたことを高く評価しているが、このようなスラム内での組合が、やがて労働組合、医療組合運動、生活協同組合等の活動へと拡大されていく。

> 資本家も人であれば労働者も又同様人である。◇[47]々に相互合共力して、各その持てるものを提供して、共に人類と◇しての幸福な人生を送らねばならぬと考へ来つて、最近労働者は組合を作り、一致団体して事に当、人間並の生活を送ろうと計ものである。[48]

組合運動に対するハルの理解が、次第に明確に、自覚的になってく様子が表れている。

労働の尊厳

上記の引用で、ハルは「資本家も人であれば労働者も又同様人である」とするが、ハルは労働に対してどのような視点を持っていたのだろうか。労働に関してハルは自らの体験を次のように述べている。

> 仕事は面白いものである。嬉しいものである。又愛すべきものである。（中略）労働は決して嫌なものではない。之を好まない理由は労働そのものでなく、労働をする人に於いてそのことを喜こばれない多くの事故が有るからである。病

46　賀川春子「感謝すべき青年の群れ―神戸時代の物語」（『雲の柱』15（10）、雲の柱社、1936年）（三原、前掲書 第1巻、229頁）

47　「◇」表記は、『賀川ハル史料集』において、「解読不能」とされている文字。

48　賀川ハル「労働婦人と保険問題」（1919-23年頃）（三原、前掲書 第1巻、437頁）

弱な身体に長時間の労働をとらなければならない様な生活状態であつたり、労働者だからと云つて、その子女に教育することは贅沢だと評されたり、女工は病気でも医者にも掛れず住む家と云つても屋根裏に住まねばならないとするから、労働者たることも嫌になるのである。それらを取り去るならば、労働そのものは全く喜びであるのである。

仕事に対して一つの熟練を得ると誇りが出来る。（中略）製本工が又その書物の製作に対して、熟練の技量を自覚する時に之にも亦誇りがあるものである。[49]

労働環境の不備ゆえに多くの苦しみが伴うが、労働そのものは「面白」く、「嬉しい」ものであり、さらには「愛すべきもの」、そして「喜び」であるとハルは言い切る。

労働に関連するハルの言説からは、当事者の視点に立った労働者としての喜び、向上心、労働そのものを尊厳あるものと考えていた姿をみることができる。ハル自身が女工として８年半を過ごしていた経験から、工場などで働く労働者の女性たちを取り巻く環境の問題は、ハル自身の経験に根差した具体性を持った課題であった。

労働は決して賤しいものではない。労働は尊いものである。そして、労働者もまた尊い存在である。上記でハルが労働組合の必要性を述べるとき、その意識の根底には、労働に対する敬意があった。この労働の尊さが守られるためには労働環境の改善が必要であり、そのためには組合運動が必要なのだ、というハルの確信だろう。組合を結成すること自体が目的なのではなく、ハルにとって真の目的は、一人一人の人格が尊重されることであり、組合運動はその手段であったといえるだろう。

生活者としての視点

またハルが組合運動の必要性を述べる時、それは理論からではなく、むしろ生活者としての目線から語られる。

茲に於て団結の必要を思ひます。中心より出ずるところの叫び、正義とそして団結の力であります。（中略）一家の主婦達一人一人、社会に改革を求めることもありませう。中心よりの訴へを心に持つ人もあるでせう。各自に種々の問題が有ること丶思ひます。然し、一人一人では極めてその力の薄弱であること

49　賀川はる子『女中奉公と女工生活』（1923年）（三原、前掲書 第１巻、42頁）

を感じない訳には行きませぬ。[50]

覚醒婦人協会活動時期の言葉であるが、ここからは、「一致」団結して「相互」に協力することにより、「正義と団結」の力が生まれるのだ、という「一家の主婦」の１人としてのハルの確信が読み取れる。

豊彦とハルの組合運動への確信

ハルは、上記の引用において、社会における愛の行いとして組合運動をあげ、それは小さな一人一人が団結して助け合うことであるとした。豊彦もまた組合運動の必要性を説くにあたり、次のように述べる。

> 相愛互助の精神に満ち、共存共栄の道を辿り、教育によって相互扶助を実現し、隣人愛意識を高めなければ駄目である。[51]

> 個人だけではなく、社会の救いのうちにも働くイエス・キリストの救いのリアリティを見せなければならない。ゆえに私は、生活協同組合や、信用組合、学生協同組合を設立している。これは、行動におけるキリスト教の兄弟愛である。[52]

ここでは、「社会の救いのうちにも働くイエス・キリストの救い」の現実的形が生活協同組合、信用組合、学生組合であるとし、「これは、行動におけるキリスト教の兄弟愛である」と明言する。その内容は、「相愛互助」「共存共栄」「相互扶助」「隣人愛意識」といった表現で記される。

ハルも生涯にわたり、組合運動の重要性を確信し続ける。次の三つの引用は、いずれもハルが70歳代後半頃の執筆である。

> 貧民と共に生活して、人々の福祉、病人の為医療、農民のために対する方法も得られた。労働運動、病者の医療組合運動、キリスト教宣教、教育事業、経済運動にそれぞれ組織に努力した。その運動ハ貧しい者が助けられ、病苦から救。

50　賀川ハル「消費者の団結と婦人」（三原、前掲書 第１巻、436頁）

51　賀川豊彦「新協同組合要論」（1947年）（賀川豊彦、前掲書 第11巻、505-506頁）

52　Toyohiko Kagawa, *Brotherhood Economics* (New York: Harper & Brothers, 1936), 13.

> 経済的の金融など、愛の精神を基礎としての救済運動に終世努力した。大きい資金、又政府の救済事業としての各種の事業があるが、人権尊重のキリスト教精神の基礎の上に此の仕事がされねバならぬ[53]

> 教会外社会に愛を行なへと注意されてある。主の恵のうちにある我々ハ社会に良い働を尽し度い。之にハ、生活を共によくする生活協同組合ハ婦人のなすべき一つの働きである。[54]

> キリストハ貧しいやもめの献金に価値を認める。無力な病身な貧しい賀川も、主に捧げたときに恵を得た。生命ハ保たれ、伝道ハ広げられ、世界に福音のため赴いた。仕事も、伝道に社会福祉に組合運動に尽すを得た。[55]

ここには、一人の力では解決がなくとも、組合運動を通して人々が共に事を行う時に大きな力が生まれることへのハルの確信がある。

稲垣は、公共哲学の立場から、豊彦からうけつぐべき遺産とは、「自治的な市民社会を作るための『友愛』と、そこから出てくる『連帯』による幸福形成の思想と行動ではないだろうか」[56]と提唱するが、このような公共哲学的発想からいえば、上記までのハルの言説から語られる「主婦達一人一人」の「団結」による組合運動の必要性もまた、公共領域における友愛と連帯に基づく組合運動の必要性ということができるだろう。

キリスト教信仰に動機づけられた組合運動

さらに、その組合運動の確信の基底となっているものは、豊彦にとっては、「社会の救いのうちにも働くイエス・キリストの救いのリアリティ」であり、「行動におけるキリスト教の兄弟愛」であった。そしてハルにとっては「人権尊重のキリスト教精神」であり、「主の恵」であった。両者にとって、組合運動と明確なキリスト教信仰とは分離することのできない確信であった。

53　賀川ハル「おぼへ」（1967年）（三原、前掲書 第3巻、153頁）
54　賀川ハル「おぼへ」（1969年）（三原、前掲書 第3巻、150頁）
55　賀川ハル「おぼへ」（1967年）（三原、前掲書 第3巻、153頁）
56　稲垣久和「公共哲学から見た賀川豊彦」（『明治学院大学キリスト教研究所紀要』［42］、2009年、270頁）

このように賀川夫妻が力を注いだ組合運動であったが、その活動がすべての場所において受け入れられていたわけではない。1920(大正9)年10月10日の日記には、思うように理解が得られない状況を、次の様に記していらだちを表している。

> 関西の労働者は賀川に依つて教えられ、人道的に行かねばほんとの組合は出来ぬと知つて関東の様に赤化しないから、それを指導する賀川は彼等には余程邪魔らしく見える。[57]

このような反対する力も働く中で、ハルと豊彦はキリスト教の愛の実践としての組合運動の重要性を確信していた。

賀川夫妻にとって組合運動は、明確なキリスト教信仰を基底として、私的な領域を超えた市民社会においての女性や労働者を含む、多様な他者のための、多様な他者との協働による活動の一つの実践でもあった。

まとめ

以上、ハルの市民社会に対する理解が大きな変化を遂げる前半生を中心に、三期に区分してその変遷過程を考察してきた。キリスト教入信前には、ハルの関心はきわめて閉じられており、私的な領域に限定されていたが、ハルがキリスト教信仰に入信した最初に目にした豊彦と共にスラムで活動する救霊団の青年たちには、信仰を市民社会において実践する姿があった。キリスト者としての歩みの中で、ハルの市民社会に対する視点は次第に広がり、ハル自身の身近な親密圏にある人々への個人的な関心だけではなく、多様な職業や多様な価値観を持つ人々が集う市民社会への関心へと広げられていく。そして実際に、キリスト者だけではなく、志を同じくする人々との協働によって市民社会における諸活動を展開していった。そしてその活動の動機となるものは、明確なキリスト教信仰であった。

本稿の後半でも、ハルと豊彦の言説から、諸組合活動に対するそれぞれの思想をわずかながら比較検討したが、生涯にわたる夫妻の活動と思想の意義を掘り下げるためには、このような両者の思想の比較検討はさらに必要であろう。また、本稿では、ハルの前半生に焦点を当てて検討を行ったが、ハルの後半生における教会や幼稚園、

57　賀川ハル「1920年日記」(三原、前掲書 第1巻、264頁)

病院、農民福音学校、協同組合等々、多方面に広がる活動におけるハル自身の役割や、豊彦の死後20年以上にわたり雲柱社理事長を務めた働き等への考察も必要である。さらに、夫妻の市民社会活動、多様な他者との協働による多様な他者のための活動を歴史的回顧だけに終わらせないためにも、そこから今日的な意義を継承していくことも今後の課題である。

ハルはその前半生において発展的変化を遂げた市民社会への理解をもって、以後も生涯にわたり、夫・豊彦と共に市民社会における活動を継続していく。その理解はまた、ハルが取り組む婦人運動である覚醒婦人協会の活動の基底にもなる。豊彦・ハル夫妻の公私におけるパートナーシップには、このようなハルの市民社会に対する理解もまた重要な役割を果たしたといえるだろう。